

「桃の節供」とも呼ばれる雛祭りは、女の子の成長と幸せを祈って行われる、春の訪れを告げるにふさわしい年中行事です。

本展覧会では、尾張徳川家十四代慶勝夫人となった矩姫かねひめの雅びで気品あふれる雛人形や、十一代齊温夫人となった福君ふくぎみの雛道具を中心に展示します。また明治から昭和にいたる尾張徳川家三代にわたる豪華な雛段飾りや、享保雛や古今雛などの町屋の雛を展示します。

かねひめ 矩姫さまの雛人形・雛道具

矩姫(貞徳院・1831～1902)は尾張家十四代当主慶勝の夫人で、福島・二本松の丹羽長富の三女として生まれ、嘉永2年(1849)にお輿入れしました。

矩姫の雛人形は、束帯姿3対・直衣姿1対・狩衣姿1対の有職雛ゆうそく(公家の装束を正しく考証して作られた雛人形)で、高さはおよそ30センチあります。当時製作された大名家のお雛様のなかでも、ひとさわ格調高い作品です。本年は5対すべてを展示します。

また矩姫の雛道具は、梨子地に松竹梅の折枝と唐草文様を配し、銀の金具を打った豪華なつくりで、80点余りが伝えられています。

内裏雛飾り

有職雛(束帯姿・直衣姿・狩衣姿)

五対

五人囃子(雅楽)

一揃

犬張子

一対

松竹梅唐草蒔絵雛道具のうち

貝桶・合貝

冠台

鼻紙台

花瓶・花台

台火鉢 など

雪洞

源氏物語図屏風

八双のうち

源氏物語 胡蝶・紅葉賀図屏風 俊恭院福君(尾張家十一代齊温夫人)所用 一双 ほか

矩姫が所持したもう一組の小さな雛人形です。江戸時代の終わり頃、将軍家や御三家では、雛飾りが大奥の二～三箇所にしつらえられたといわれています。この人形たちの箱には「御内証」の貼札があり、プライベートな場で飾られたと考えられます。

牡丹唐草蒔絵雛道具は、徳川十一代将軍家斉の雛道具と伝えられ、後に由緒あって矩姫が購入したとされています。その真偽は明らかではありませんが、江戸時代の末ごろの雛道具の姿をとどめています。

内裏雛飾り

有職雛(衣冠姿・直衣姿・小直衣姿・狩衣姿)

五対

七人囃子(雅楽)・三人官女・隨身

一組

牡丹唐草蒔絵雛道具のうち

芥子雛

一組

尾張徳川家伝来の雛道具

きくおりえだまきえ

菊折枝蒔絵雛道具

～福君さまの雛道具～

五撰家の筆頭・近衛家から尾張家十一代斉温に嫁いだ福君(俊恭院・1820～40)の雛道具のひとつ。梨子地に菊の折枝を配し、所々に近衛家の家紋である抱牡丹紋と徳川家の葵紋を散りばめたデザインを施し、金具にはすべて銀が用いられています。福君の婚礼調度として伝来する菊折枝蒔絵の諸道具と遜色のない精巧なできばえを示しています。今年は全点を展示します。

貝桶

櫛台

源氏簞笥

香盆飾り

厨子棚飾り

鏡建

将棋盤

煙草盆

黒棚飾り

湯桶・盥

碁盤

乗物

書棚飾り

見台

双六盤

緋傘

ほか

だきぼたんもんちらしまきえ

抱牡丹紋散蒔絵雛道具

～福君さまの雛道具～

「菊折枝蒔絵雛道具」とともに、福君が所持した雛道具。梨子地に金貝と蒔絵によって、近衛家の家紋である抱牡丹紋を配し、金銅製の金具を打っています。菊折枝蒔絵の諸道具と比べず法に多少の違いが認められますが、その豪華さと格調の高さに独特の趣きがあります。

貝桶

鏡台

角盥・椀

台子皆具・茶坊主人形 ほか

しょうちくばいからくさまきえ

松竹梅唐草蒔絵雛道具

～矩姫さまの雛道具～

矩姫の雛道具です。梨子地に松竹梅の折枝と唐草文様を配し、銀の金具を打った豪華な仕様です。その数は80点余りにおよび、当時の婚礼調度のありさまをよく伝えています。

花瓶・花台

冠台

行器

食籠

鼻紙台

貝桶

台火鉢 など

てっせんからくさまきえ

鉄線唐草蒔絵雛道具

徳川美術館に伝えられた最も古い雛道具で、十七世紀末から十八世紀初頭頃に制作されたと考えられています。本来の所用者は未詳ながら、懸盤(お膳類)と行器(食べ物を入れる器)は、のちに尾張徳川家十一代斉温夫人福君が所持していました。

懸盤

碁盤・将棋盤・双六盤(個人蔵)

あわせがい
合 貝

貝合わせは蛤の身と蓋を合わせる遊びです。二枚貝は特定の一片としか合わないため、合貝とそれを納める貝桶は、結婚の象徴として婚礼道具の中で最も大切にされました。

合 貝	月に芒蒔絵貝桶 附属	徳川義直(尾張家初代)・京姫ほか筆	江戸時代	17世紀	
合 貝	菊折枝蒔絵貝桶 附属	俊恭院福君(尾張家11代斉温夫人)	所用	江戸時代	18世紀

さまざまな人形・雛道具

犬張子（犬笛）	建中寺蔵	二対
天児・這子		一組
御所人形 若君・姫君		二対
色絵唐子人形 貞徳院矩姫（尾張家14代慶勝夫人）所用		一組
染付食器		一組
賀茂人形 猿回し・車引き・豆賀茂人形		

尾張徳川家三世代にわたる雛段飾り

徳川美術館の創始者である、尾張徳川家十九代義親の夫人米子（1892～1980）、二十代義知夫人正子（1913～1998）、そして二十一代義宣夫人の三千子（1936～）の三世代にわたる尾張徳川家の雛段飾りです。数組の内裏雛を上段にすえ、三人官女、五人囃子をはじめ、節供の祝儀としてさまざまな方々から贈られた御所人形、毛植え人形などのさまざまな人形、さらに多種多様の道具揃えが並べられ、江戸時代以降の大名家の雛段飾りのありかたがよく示されています。

市松人形	瀧沢光龍齋作 徳川正子（尾張家20代義知夫人）所用	一体
内裏雛飾り	高橋博子（尾張家20代義知次女）所用	一式

町屋の雛

江戸時代は、雛まつりが盛んに行われ、庶民のあいだにも定着しました。江戸時代中期以降、贅沢な雛を取り締まる法律が幕府からたびたび出されましたが、豪華な雛やさまざまなスタイルの雛人形が登場しました。大名家の雛とは違った雛人形・雛道具をご紹介します。

享保雛	…享保年間（1716～36）に流行した形式の雛人形	
	享保雛 志賀直哉旧蔵	個人蔵 一対
	享保雛	一対
古今雛	…江戸時代後期に流行した形式の雛人形	
	内裏雛飾り 三上家寄贈	一式
	内裏雛飾り 個人蔵	一式
有職雛	（高麗屋寄贈）	一対

など